

人間関係を深めるインターネットを活用した学校間交流学習の試み

横浜市立大口台小学校 教諭 佐藤 幸江

学校間交流学習を稲垣（＊１）は、「生活地域の離れた学習集団の間に協同的な関係を築き、学習対象へのリアリティを獲得することを目指した教育方法」と定義し、そのキーワードを「学習対象へのリアリティ」としている。そして、その交流の段階を、目的によって「コミュニケーション・コミュニティ・コラボレーション」というレベルに分けている。ただし、活動によっては、それらのレベルにきっちり当てはめることのできないもの起こり得る。

本実践は、6月～3月の長いスパンの中で「コミュニケーションからコラボレーション」までを目的とし、以下のように中心的な活動・つきたい力を明確にし、固定化された人間関係を見直しながら深め合えるよう進めてきている。

1 本学年の課題

男子19名、女子38名というアンバランスさからくるのか、男子全体に活気がない。その分女子数名がリーダーシップをとっているが、グループが固定的になっており、互いに牽制し合いトラブルも見られる。そのような人間関係の中では、自己表現や前にでることを嫌がり、みんなの前で失敗することを怖がる子が見られる。

2 中心となる活動とつきたい力

（１）交流体験

交流体験をすること自体を主目的とする。電子掲示板、携帯電話を活用したテレビ会議、実際に会った交流などで互いを理解し合い、地域や自分自身を振り返り、今後に生かしていくことができると考えている。この活動では、コミュニケーション能力や他地域理解の能力、さらにそこで起こるトラブルを丁寧に見取り、学びにつなぐことにより情報リテラシーの育成も目指す。

（２）実践報告

交流校それぞれの学級・学年での実践を報告し合い、そこから話し合い活動や発表をすることで交流を深めていく。本校では、ユニセフの活動に参加しているが、それについて交流校にも提案する中で、その意義や参加する気持ちを深めることができると考えている。学習を追究する力や表現力を鍛えていけると考える。

（３）協働活動

お互いの地域を訪問し合う体験学習や卒業に向けた活動を、子どもたちの手で企画・運営する活動。電子掲示板で互いの役割を分担したり、電子情報ボードの共同学習システムを活用して考えを発表し合ったりする中で、相手やみんなのことを考えて活動するという協同する力の育成を目指す。

3 実際に起こったこと

総合的な学習の時間：「**私たちが創る！大口台小 その中で成長する自分**
＝大切にしよう！東豊田小学校の友だち＝

＝ 単元目標 ＝

- 最上級生として、一人ひとりが「学校創り」に積極的に関わることの大切さに気づきみんなが毎日楽しく過ごせる大口台小学校をめざしていこうという態度を育てる。
- 交流校との交流学習や50周年に向けての学習の中で、今の自分たちの力でできることを考え、計画を立て、みんな実践する態度を育てる。
- これまでの活動を振り返り、計画を見直し、より最上級生としての自覚を高めて活動しようとする態度を育てる。

子どもたちに実際の生活に役立つような問題解決力をつけていくためには、繰り返しの活動・試行錯誤の場の設定・様々な学習形態の体験が必要である。そこで、それらの活動がたくさんできるよう学習活動を工夫した。

本小単元では、何といても「もてなす」という立場から、相手を温かく思いやり積極的に行動せざるを得ない状況、「自分ごと」の状況に子どもたちを追い込むことになる。そこで以下のような活動が、子どもたちから提案されたり、教師側から投げかけたりした。

- 自分たちでできることや下見して困ったことなどについて、何回も話し合いをもつ。
- 「横浜のよさ」を知らせるという観点から、案内するコースを設定する・案内する場所で説明できるようするためにインターネットやガイドブックから情報を収集する。
- 東豊田小の人のために、自分たちで調べた情報をガイドブックにまとめる。
- 全員で設定したコースの下見を行い、回る順番や安全についての確認をする。
- 仲良くなるためやコースの情報を知らせるために、電子掲示板やテレビ会議、手紙などで情報交換する。
- お互いがすんなり馴染めるような工夫として「出会いの会」や名札作りを工夫する。
- 交流会で、相手に積極的に話しかけたり説明したりする。
- 自分たちの活動をデジタルカメラで記録する。
- 「もてなす」ことができたら、活動を振り返る。

さらに、これらの活動の中で、最終的には「心でもてなす」ことの大切さに気づき、そのためには、自分が大口台の友だちを思いやり協力したりすることも大切であるということに気付く活動となった。

【参考文献】＊１ 稲垣 忠編著『学校間交流学習をはじめよう』日本文教出版 2004・1

